当院における精子凍結の現状とその使用成績

◎髙橋 佳奈[1)]、小川 命子[1)]
学校法人 聖路加国際大学 聖路加国際病院[1)]

【はじめに】当院では2003年より、がん患者を対象とした妊孕性温存目的での精子凍結を行っており、その件数は年々増加しニーズは増している。

今回、当院での凍結精子を用いた不妊治療の成績について報告する。

【対象と方法】2013年1月～2022年12月までに院内外より紹介で、悪性疾患に対する妊孕性温存を希望して受診した399例のうち凍結精子を用いた不妊治療を行った39例を対象とした。

精子凍結は液体窒素蒸気凍結法で、凍結保存液を添加しセラムチューブおよびストローに分注し、−196度の液体窒素中に保存した。パートナーの採卵の際に精子融解の操作を行い、全例顕微授精による体外受精を施行し、新鮮胚、又は凍結胚の移植を行った。

【結果】当院での凍結精子使用率は9.8%であった。精子凍結時の平均年齢は34.7±6歳で、そのパートナーの初回採卵施行時平均年齢は35.5±5歳であった。平均採卵回数は1.7回、顕微授精による受精率は77.3%であった。また、胚移植あたりの着床率は27.0%（26/96周期）、生児獲得率は19.8%（19児/96周期）であり、当院生殖医療センターにおける2021年の平均着床率34.3%、生児獲得率22.1%と有意な差は認められなかった。凍結精子を用いた症例のうち17組43.6%が生児を得た。

【考察】当院での凍結精子使用率は9.8%であり、文献で報告されている平均8%とほぼ同等であった。

凍結精子を用いた顕微授精の問題点は、凍結時点で既に乏精子症の所見である患者も多く、良好な精子を選択することが難しいことが挙げられる。しかし、パートナーの年齢や不妊因子が少ないことなどにより、一般の不妊治療と大きな差の無い結果となったと思われた。当院では院外からの紹介でAYA世代の若年性がん患者が多い為、治療までの時間が無い患者のニーズに応じる必要がある。

【まとめ】精子凍結は、患者に子を持つ可能性を残す方法であり、当院での過去10年の使用実績から一般的な不妊治療の成績と遜色ない結果であることが示された。

連絡先：kanataka@luke.ac.jp